

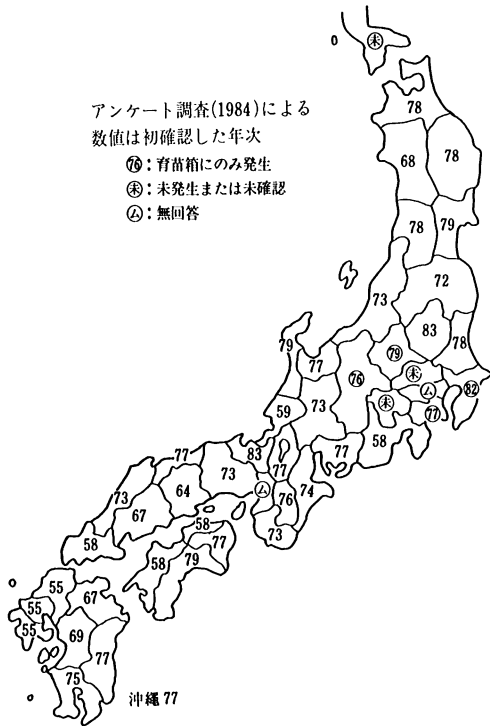
イネもみ枯細菌病の全国分布

—アンケート調査による—

茂木静夫・対馬誠也 (九州農業試験場)

Shizuo MOGI and Seiya TSUSHIMA : Replies Submitted to a Questionnaire on Rice Bacterial Grain Rot in the Whole of Japan, 1984

イネもみ枯細菌病が1983年西南暖地を中心に大発生を記録した機会に、本病の全国における発生実態を把握するため各県農業試験場に1984年6月アンケート調査を実施するとともに、発生が認められた場合は罹病穂の送付もあわせて依頼した。発生状況の結果を第1図に示し



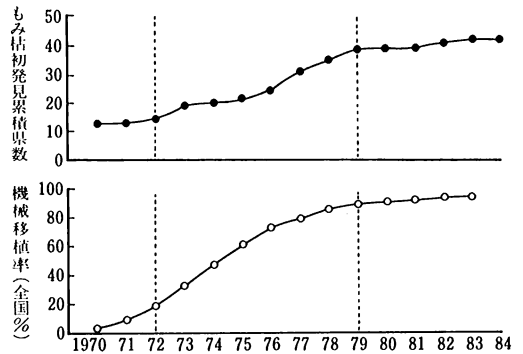
第1図 イネもみ枯細菌病の発生分布

た。本病による苗立枯れ、もみ枯れの両者ともこれまでに発生がみられなかった県は東京都、大阪府の無回答を除くと、北海道、埼玉、山梨の1道2県のみであった。苗立枯れのみが発生を確認している県は長野、千葉、神奈川、群馬の4県であった。これ以外の38県ではすべて本田のもみ枯れの発生を見ることが明らかとなった。発生主要品種は日本晴、黄金晴、コガネマサリ、黄金錦、中生新千本、ミネニシキ、ヤマビコ、ヤマハウシ、ミネユタカ、ニホンマサリ、レイハウ、ヒヨクモチ、ひめみのり、オオセト、ホウレイ、フヨウ、アケボノ、朝日、秋晴、晴々、星の光、むさしこがねなどであった(第1表)。これまで本病に罹病しない品種はなく、また早中晩生いずれの品種でも発病に好適な条件さえあれば発生することが明らかになっている。

本病の多発要因に特徴的な気象要因について34県から回答が得られた。発生要因に出穂期の高温をあげた県は全地域にまたがって14県、7~8月または8~9月の高温継続を要因とする県も14県、両者をあわせて出

穂期または夏期高温継続をあげた県が28県となった。降雨または降水量との関連については、出穂とその前後に適度の降雨があり、降水量よりも降雨日数あるいは降雨頻度が重要であるとする指摘が多かった。

本病の発生状況を年次別にみたのが第2図である。本病の初発見県数の累積推移と水稻の機械移植率を対比してみると、1972年から'79年までの8カ年間に最も機械



第2図 イネもみ枯細菌病の発生と機械移植率

移植率の増加が著しいが、これとはほぼ平行して、本病が初発見された県数が多くなっている。箱育苗方式が本病発生の一要因となっていることが推定される。

本アンケート調査による1983年の地域別発生面積および主要発生品種を第1表に示した。九州地域125,132ha

第1表 1983年度イネもみ枯細菌病の地域別発生面積 (アンケート調査による)

地域	発生面積 (ha)	備 考
北海道	0	未発生
東北	0.5	宮城・秋田のみ発生、ササニシキ・ヨネシロ
北陸	5.0	新潟・富山のみ発生、アキヒカリ・日本晴
関東東山	3.0	栃木のみ発生、星の光・むさしこがね
東海	8,153.0	4県とも発生、日本晴・黄金晴・秋晴・晴々
近畿	15,470.0	大阪府以外発生、日本晴・中生新千本、ホウレイ・ヤマビコ・フヨウなど
中国	13,849.0	全県発生、日本晴・ヤマハウシ・アケボノ・ヤマビコ・コガネマサリ・ミネニシキ・中生新千本など
四国	27,020.0	全県発生、日本晴・コガネマサリ・ひめみのり・ミネニシキ・オオセト・黄金錦など
九州	125,132.0	沖縄以外発生、日本晴・黄金晴・コガネマサリ・ミネユタカ・ミナミニシキ・レイハウなど
総 計	189,632.5	

を筆頭に、四国27,020ha、近畿15,470ha、中国13,849ha、東海8,153haなど総計189,633haに達した。また送付された100点以上の罹病穂から分離された細菌の大部分はもみ枯細菌病菌であった。

以上から、本病が北海道と関東地域の一部を除いて、ほぼ全国的に分布、発生していることが明らかとなった。